

一
九
六
本

概要

筑波大学付属図書館蔵『宮本文庫目録』における「文部省発行錦繪（衣食住之内家職幼繪解之圖等）」は明治六年（一八七三）に文部省より発行されたものである。ここでは所蔵番号「A 950 宮木 196」本（以下196本）を扱う。

196本は全二十八枚からなる。しかし、見返しに墨で三十二枚の記載があり、四枚紛失したと思われる。表紙はボール紙に布張り、見返しは銀砂子で左下に「宮木藏書」の縦×横、三、四×一、五、〇mの朱字随円印（以下宮木印A）があり、その下に鉛筆書きで「18015236」（蔵書整理の際に便宜的に使用された分類）とある。背表紙は剥がれたのか紛失してしまっているが、糊づけの跡が見られないことから当初から用いらなかったことも考えられる。全体に綴じ部分にひどい痛みが見られ、綴じ部分から剥がれているものが多くある。

196本の前半二十枚は『衣食住之内家職幼繪解之圖』で作者は歌川派の絵師二代国輝である。後半八枚は国輝の作ではなく、作者は不明である。後半八枚はいずれも幼児に道徳を説く内容となっている。196本は197本と画題の重複するものが相当数ある。

前半二十枚を手がけた二代国輝は天保元年（一八三〇）生まれ明治七年（一八七四）に没する。姓を山田、名を金次郎という。作画期は文久元年から晩年に及んでいる。三代豊国の門人で、初め二代国綱を名乗り慶応元年二代国輝と改める。画号は一雄齋、一曜齋、曜齋などがある。天保元年より役者絵など描き、合作の「末広五十三次」なども参加した。明治に入ると、東京名所絵のほか「築地ホテル館」「富岡製糸工場」など開花風景を描いている。その作品は資料的価値が高いとされている。教育画や技術画も手がけている。（伊藤加奈子・沖田友紀・

重田香澄）

【凡例】

通し番号、画題

- ① 左右
- ② 傷・補修の状態
- ③ 印章
- ④ 詞書
- ⑤ 内容

一、「鍛冶屋」



① 右

② 綴じ部分が上に向け大きく破れ、虫食い等がある。画面下段の金床に滲み。上段右隅と中央やや左側、中段左端から下段左隅にかけて虫食いによる欠失、下段左端より右側にかけて広い範囲に波打ち、また四隅の角に破損。摺り九回。

③ 画面上段右側に「寄付宮木」の朱字印(三・七×一cm 以下宮木印B)、その左下に「宮木認章」の紺字方印(一・一×〇・九cm 以下宮木印C)、その右上に「東京文理科大学付属図書館圖書之印」の朱字印(五・二×五・二cm 以下文理科印)。その左下に重なるようにして「文部省製本所発行記」の朱字方印(二×二cm 以下文部印)。下段右側に「宮木宥式氏ヨリ寄贈登録

和I73801号昭和12年7月8日」の黒字重圍印(三・九×五・五cm)。画題は二重枠。下段左隅に墨字で「曜斎國輝」の署名。

④

「鍛冶鉄物は諸国より出るといへとも先／京都より廻るを登り／といふ東京にて製／造するを地といふ是は／鑛を夫々の品に製するハ／俵炭といふ極やわかな炭を細か／にくだきふいごといふ火おこしの／具にて火を起し火の中へ幾度も／入ては出しかなどこの上にて三人／又は四人にてあひ槌にて段々きたへ／何しなによらず造るの図」、中段右側に「大中小の釘を／五十本百本と／かぞへて／たばねる／図」

⑤

鍛冶職人の仕事の様子。作業場の土間で三人の男が真っ赤に焼けた鉄を打付ける。右側の座敷の方から女が一人障子を開けて何かを差し出す。

二、「畳屋」

① 左

② 本として綴じた部分が下から中央やや上まで破れ、端の方を中心に汚れ、所々に虫食い・染み・滲み等があり。摺り十回。緑の版がやや左に見当がずれているものと思われる。



③

画面上段右側に宮木印B、その左下に宮木印C、画題の左に文部印がそれぞれ捺されている。画題は二重枠。

④

「畳屋はわらを縄にて／あみ夫を柵にて打ち／だんだんとわらを重ね／麻糸にて幾通りにか／さして床とする此きり／やふによりなんとふりとて／床の上中下あり畳表は／備後より出るをよしとす／艸にて生るゝをよく干揚て／麻糸にて織なりこれにも／艸によりりうきうおもて／ありへりは麻の染たるを用ゐ／これを畳さしが製す図」とある。又、下段左隅には墨字にて「國輝画」の署名がある。

⑤

畳屋の作業場の様子。画中には5人の人物。中段左側の人物は柵を持って藁を打ち、その左側では藁を編みこむ作業が行われ、下段では座つて台に乗せた畳を固定し麻布を縫い付ける人物、中央やや上部には「たたみさし」という道具

を用いて畳のささくれを押し込めて？いる様子が描かれる。画面右下では若い男が藁を運ぶ。中段右側には出来上がった畳が積み上げられている。

三、「木材の買いつけ」



① 右

② 左側の緩じ部分は完全に剥離し、赤っぽい染みになっている。縁を中心にした汚れ・擦傷の他、左中下段に虫食い・染み・鉛筆書き痕・擦傷に よると思われる色落ち等ある。摺り八回。数箇所に色の欠落が見られる。

③ 画面上段右側に宮木印B、その左下に宮木印C、画題左に文部印。がそれぞれ捺されている。下

段左隅に墨字にて「曜斎國輝画」の署名がある。

④ 画面上段雲の中に「大工普請を／受合材木屋へ

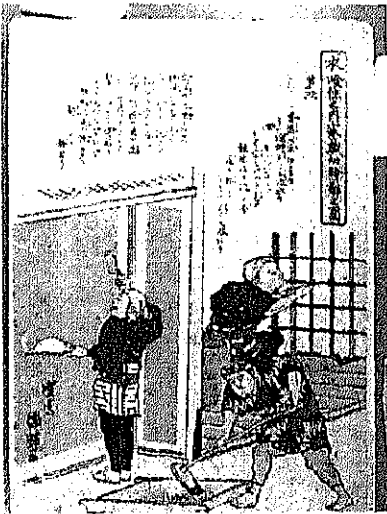
／諸色の木口を／買に来る／値段をかけ合／入用のしなじな／□と□の図」(□は未解説)

画面中段左上、後景の空に「材木の／しよしきを／見たてる／ところ」

⑤ 材木問屋の様子である。画面には三人の人物。

前景には煙草を持つて座る若い手らしき男と「材木蔵入控帳」の前に座るそるばんをはじく男、右側にはお茶を出す童子が描かれる。後景には沢山の材木と品定めをするような二人の人物が描かれる。

四、「植木屋、左官屋」



① 左

② 台紙に対して作品が左にずれている。画面左辺全体に虫食い。下段左側に擦傷、左側の人物の足に茶色の汚れ。摺り八回。

③ 画題の左に宮木印Cと文部印が捺されている。下段左隅に墨字にて「曜斎國輝画」の署名。

④ 二重に枠組みされた画題の左「普請出来あがり

の／うへ縁側先へ手洗水の／流しなどをつけるを／はち前といふて是を／植木屋か作る図／庭は好みによりて／色々工風あり、二段落目には「左官の上塗りといふは／仕揚仕事なり是も／人々の好みに随がひ／根岸の土又は砂へ／いろいろの絵の具を交／あわせつゝのまたにて／ねばりをとり塗り／其外しつくゝといふは／牡蠣の貝の焼たるを／製したる／粉なり」

⑤ 画中には三人の人物。右側より手前に桑のような道具を使って漆喰を混ぜ合わせる左官、奥には手洗いの流しをつける「はち前」という棚組みを竹と木材を用いて作る植木屋、左には壁の仕上げに上塗りをする左官が描かれる。灰色の漆喰の上に白絵の具を混ぜた塗料が描かれる。

五、「普請場地ならし」



- ① 右
- ② 画中左端全体に渡り虫食い。画中最下段に汚れがあり、右側にも広がる。絶ち落としはやや右より。左下署名の周辺、左上などを中心として毛羽立ち。摺り十回。
- ③ 画題の左に宮木印Cと文部印。下段左隅に墨字にて「暉齋國輝画」の署名。
- ④ 「大工手伝の／人足／普請場地ならしを／して／普請の絵図と／引合柱はしらたつ／ところへ穴をほり／地行といふて松丸太／のくい又はじやりなどつき／いれ其上へ土台石をすへるの図／此人足を／東京には薦人足仕事／ともいふ」
- ⑥ 家を建てる際の基礎工事の様子。画中には八人

六、「鉋削り、鋸ひき」



の人物が描かれる。地面に老人、足場中段に六人。上段に一人いる。「引合柱」を立てるための土台を備え付ける作業として丸太のくいを使得て地面を固めている場面で中段の六人がかりで丸太を結びつけた縄で引っ張り揚げる。上段の大工が方向を定め下の老人が位置を確認しているものと思われる。

- ① 左
- ② 絶ち落としが左にずれている。上下辺ともに台紙が余っている状態。下段左側から右側にかけて全体に擦傷。左隅の職人の持つのみのおあたり五cm程度の皺。同じく左側のおのをもつ人物の足元に黒い汚れ。中央黒いはつぴの人物の腿付近に染み。上辺全体に黒ずみの汚れ。摺り

九回。

- ③ 画題の左に宮木印Cと文部印。下段右隅に墨字にて「國輝画」の署名。
- ④ 「大工かんなげづり鋸引／ていうなはつり并に／のみにて柱へぬき穴／などをほる図／又そまといふは／よきといふ具にて／大工のさしづに／まかせおふき／なる木を／はつるも／あり」
- ⑤ 材木を加工している様子である。画中には七人の人物。職人達は鉋、鋸、斧、ノミなどの道具を持ち角材を加工している。道具を振り上げる人物や鋸を力をこめて引く人物など作業のリズミカルな様子が伝わって来る。
- 七、「筏による木材の運搬」



① 右

② 画題の右に他のページの宮木印Bの移りと思われる汚れがある。上下左辺に汚れ、下段の右側から中段やや上にかけて擦傷。左側も同様。下段から中段やや上にかけて擦傷。左側中段から下段にかけて六箇所虫食いによる欠失。左下の角が剥落し丸くなっている左辺の下方の破損が著しい。摺り八回。

③ 画題の左に宮木印C。その下に文部印。下段左隅には墨字にて「曜齋國輝画」の署名。

④ 「山方荷ぬしと／いへる商人より／諸かた材木の／問屋へいかだ／或いは船にて／品々の木品なを／つみ送りする図」

⑤ 画面は遠景、中景、前景に分かれており、前景には筏に乗った二人の人物が描かれる。一人は長い「さお」を持って筏を操り、もう一人の編み笠をかぶった人物は座って煙草を持っている。三角家根の中では炭火がおこされ煙が立ち昇っている。中景には同じく筏を操る人物と葦のような植物、遠景には霞がかつた山が描かれる。

八、「鬼瓦・樋づくり・壁板の洗ぬり」



① 左

② 下段左隅に擦傷。上辺に綴じ方の不揃いによると思われる日焼け又は汚れ。摺り八回。

③ 画題の左に宮木印Cと文部印。下段右隅に墨字にて「曜齋國輝画」(口は未解説)の署名。

④ 「十八 家根じつくみとて瓦のすき／を雨のまわらぬよふにねる／も左官の仕事なり鬼瓦／も好みにて家号印又は紋所／なぞ差別あり／十九 とみといふて／木にてくりたるも／あり大いはいは大き／なる竹をふたつ割／にしてふしぶしをよく／けずりのきさきへはり／がねにてとめるしぜん／家根より

⑤ 落ちる雨水を／うけるためなり／二十 洗ぬりは家のそと／まわりを好みに随ひ／生洗又ははい墨を入れて／ぬるも雨のしづきか／かりても木のくさらぬ」

画面下段右 「此外塗屋土蔵など／早々其人の好みあれども／此職方口出来るゆへ此篇／まにて家造りの一通りしる也(口は未解説)」

⑤ 画面には五人の人物。うち二人は屋根又は足場に登り、家根の向こう側の人物は瓦の土台を塗り足場に座る人物は「鬼瓦」をつけている。画面右側では下から雨樋を持ち上げる人物と屋根の上でそれを固定する(？)人物が描かれる。左側には木の腐敗を予防する為に外壁の木に洗塗りを行う人物が描かれる。

九、「樵夫」



① 右

② 左辺は全般的に左側に一〜二ミリ折れ曲がっている。左辺中段に10センチ〜15センチ程の半楕円状の染み。四辺全体に汚れと毛羽立ちがみられ、特に左下が著しい。左下と右下に擦傷による損傷、又下辺左右角は欠損。左上隅には皺、下段中央付近には付着物。左辺の中段やや上から六箇所に虫食い、上の三つは破れている。摺り十回。

③ 画題の枠の下に「第二」の墨字、その左、詞書の上
に宮木印Cがある。中段右端に墨字にて「國輝画」
の署名がある。

④「家を拵へる木品のもととは國々より／出ると雖も
先期は日向檜は尾州松は上野などから／出づ
をよしとす其外國々の処において／能すじや
うに生まる木品を選のみ其所の山／方商人とい
へるが山主より買取／根切と唱ふる木がこり其
木を切／たをし土台柱其他／いろいろに用ひに
なる寸間を小挽に／ひかせ夫を山より／里へ
出すの図」

⑤ 小挽きとは、木こりが切り出した木を木材に引
く職業の人のことである。画中には3人の人物
奥の二人は斧を持って木を切り倒す。木には倒
れる方向を誘導する(う)ロープが結び付けられ

ている。手前には小挽きと思われる人物が描か
れ、木こりが切り倒した木の小枝を落として木
材に加工している。

十、「経師屋」



① 左

② 下段中央手前の人物の左膝に群青がかつた汚れ
がある。他のページからの色移りかと考えられ
る。右辺全体に擦傷があり、特に中段部分はめ
くれあがっている。摺り八回。

③ 画題は二重線で囲われ二重線の間は石黄、文字の
周りはローダミンが用いられている。画題の左に
文部印その下に宮木印C。下段右隅に墨字にて「曜
斎國輝」の署名。

④「第四 経師の障子を張には美濃紙／とて美濃よ

り出る紙なり是／にもはん草といふて紛へる
紙あれ／ども本艸をよしとするゆへは美濃の
／みたらしの水にてすくゆへは美濃の事を

御手洗ひともいふなり先紙の／曲りをみては
ぢをたちおとしせいふ／のりにて紙をつきあ
わせ障子を張上る／なり／又襖を俗に唐紙
といふ／是を張にはまづ反故紙／にて骨をし
ぱりといふて下／ぱりをいたし其上へ袋張／
といふて紙の三方へのりを／つけなぞへに三
べん／又は四へんもはりまた／白紙にて上紙
下を二へ／んべた張をいたし其／上へうわば
りをする／なり／上張紙は其好みにしたが／
い有馬唐紙ぐわん石唐紙／まに合唐紙雁皮帯
其外／色いろいろあり引き手ふちなどは同くは是
に順ずなり／此図は張付けといふて／天井座
敷に壁／を張たてる／ところ」

⑤ 襖や障子張りの仕事を職人のことを経師と
いう。これはその仕事の様子である。画中には
四人の人物が描かれ、右奥の人物は障子を張り
中央手前の人物は模様の入った襖(?)に手をか
けている。その後ろではかがんで紙に糊を塗る
作業が行われる。左側のこちらに背を向けて立
つ人物は壁に直接紙を張っているようである。

その人物の直ぐ左詞書によると張付という天井屋敷に壁を張る作業のようである。

十一、「建具屋」



① 右

② 左隅に手垢のような汚れと擦傷、左辺全体には五カ所の虫食い。又、左辺上方には毛羽立ち。上辺中央とその下の障子の上、左辺の下方左下隅の署名のところなどに染み、汚れ。画中鏝の「黒」は薄く滲む。中央の柱に茶色の汚れ。左下隅に剥落。摺り十一回。壁板、立てかけた板、柱部分に畳しの表現。

③ 画題の左に「第六」の墨字と文部印、その下に宮木印Cがある。下段左隅に「國輝画」の署名。

④

「建具屋は雨戸／障子其外襖の／ほねいずれもその／はまるべきしき居／かもへの寸尺を見／て其好みにしたが／ひ檜もみ杉さわらの／木品を挽わり／夫々に見斗ひ／製造する／」

⑤

四人の建具屋が雨戸や障子の木枠を組むもの、木材を切りそろえるものと分かれて作業をしているところの図。手前の人物が規枠の凹型をノミで切り出し、中央右側に人物がそれを組んでいる。中央左の人物と奥の人物はそれぞれ「かもへ」の寸尺にあわせて木材を鋸で切りそろえている。手前の人物の左には三種類ほどのノミが並べられ、木枠を組む人の足元には金槌が見られる。

十二、「石工・水縄」



① 左

② 画面左下から右下にかけて汚れ。左上隅に折れた跡。左辺は擦傷でぼろぼろで、上段と下段に一つ、中段に二つ、虫食い。全体的に黄色の版がずれている。詞書部分中ほどに枯草片が張り付いている。摺り八回。

③ 画題の左に「第七」の墨字と文部印、その左斜め上に宮木印C。画面上段左隅に宮木印B。画面下段右隅に、墨字で「曜齋 國輝画」の署名。

④ 「第七」の普請につかふ／石は伊豆の山にて／いしきりといふものが／切出すを船にて所々／の石屋へ積来るを石工が／かたきやわらかきの生／合また寸尺を見斗ひ／夫を土台下へひきこむ／やうにきさむの図／第六／大工普請場へ水縄といふて四方へ杭を／打麻縄引張其下に水もり台といふて角なる木にみぞのつきたるをおき／それへ水を流し地面の高びくを見る図」とある。

⑤ 奥の二人の人物が石工で、寸法を合わせて土台下へ引く石を切り出している。手前の三人は、「水縄」という、地面の水平具合を測っている。



① 右

② 左下隅に擦傷と汚れがある。右辺上下隅に汚れがあり、右辺は二mmほど折れている左辺の劣化が激しい。上辺は変色、左辺中ほどには色移り。摺り十回。柱に囲まれた部分(土壁?)の表現に灰色のぼかし、板間の部分に「板ぼかし」。竹や縄の緑色は石黄に水色の重ね刷りで表現されている。

③ 画面右端上方に二重線の縁取りで囲みがされている標題。その左に文部印、その下に宮木印C。左辺寄りに墨で「曜斎國輝」の署名。

④ 「家づくり建前鋪理のうへ造作に取りかかるはすえて内法の取付けものことをついふ趣の其好に随ひ大工の種々工風をこらし次第ありとはいへどあらかじめまづ天井敷居かもひ床戸棚板の間并縁台所廻り板流し雪隠などを夫夫

／取りつけ替えるの図／

* 標題の下「出格子／又はれんし窓など／さらし竹にて二三寸／おきに打付けるもあり」

* 画面左下「総て／此図は造作廻りを替えるとこる」

⑤ 画面はいわば内装工事の様子が描かれている。手前の板張りの空間から柱を挟んで、奥の空間の右側面、板が下半分に張られている。その奥は灰色の土の壁か。右奥の人物は割竹を立て掛ける作業をしている(髷結い鉢巻き、背中に「大工」の染抜き)。その横には詞書が添付(出格子)。右手前の人物はしやがんで右手に金槌、左手に釘を持ち、床板へ打付けている(縦縞の着物)。腰に釘入れのような筒をさげている。左寄り奥の人物は右手に金槌、左にのみを持ち、奥の板壁に作業している。傍らに鉋と錐がみえる。左手前の人物は桶に板をのせた踏み台に乗り、両手でかかげた角材を何やら高い所へ据え付けようとしている。手拭いを被り背中に変型「大」の字のような模様が印象的な着物を着ている。

十四、「木挽・墨糸ひき」



① 左

② 左下に擦傷、手垢と思われる汚れ。左隅、右辺中程に虫くいによる欠失。上辺には毛羽立ち。また立ち落としが左によっている。摺り八回。画面の紅は版がずれている。中央の人物に着物の輪郭線が部分的に抜け落ち。斜めの角材を支える右側の丸棒に灰色が入っていない。

③ 画面が左側にあり、その下に「応需國輝」と記される。宮木印Cは画面右上、詞書の下に捺される。

④ 「木挽は大工の墨がねをしたる木をいろいろにひきわたるの図第九大工材木を普請場へまはし角の木くちをきりおとし跡先へさしがねをあて木のまがりを見て入用の寸尺に墨糸を引図中中央の人物の横に「此角をひく器械をだい

切といふ／＼

③ 画面には四人の人物が描かれる。大きな板の角材が目立ち、中央の斜めに置かれ挽き割られて

いる木材などが画面を構成している。人物は上から、大きな鋸を両手に木を挽き割る「木挽き」

(編笠に短い着物をまとい、素手で足下はわらじ)、中央奥に一人大きな鋸「だい切」を右手右

肩に担ぐように持ち(鉢巻き、脚絆、わらじ姿)、

下方右には「ご」の上に立て膝をついて、見上げるようにして中央の木材を下から挽く者がある

(手拭いを破る)。その左にしゃがんで角材に

「墨糸」をひく人物は、左手にさしがね、右手に筆を持ち、足下に墨・糸が置かれている(肩

に手拭いをかけ、背中に○「大」の染抜)

十五、「屋根板づくり・左官(木舞づくり)」



① 右

② 右辺上下隅に折れ跡があり、左辺下隅は角の部

分が分離。左隅に目立つ皺が二ヶ所。画面左下隅周辺、短冊の辺りに毛羽立、擦傷や汚れ、変色。全体的に版のずれも激しい。特に紺色、右

下の人物の足袋や鋸がひどい。竹枠の水色や、右下の人物の唇と短冊の赤のずれも目立つ。摺り十回。「ふき板」の部分にとりどころ板ほ

かしの技法が用いられている

③ 画面の左に「第十一」の墨字と文部印、その下に、宮木印C。画面下段左隅の赤いベタ塗りの

短冊の中に、「応需 曜斎國輝画」の署名。

④ 「第十一」家根につかふやね板といふは／＼杉を薄くへぎたるをたば／＼ねて山方よりいづるなり／＼是に女竹をこまかに／＼割て五六分くら

いづ、／＼になぞへにきり鉄／鍋にてよくいり／たるを釘にして／家根屋が／ふく図／第十二／

左官のかべを作るには先こまへがきと／いふ

が細きめ竹を柱とはしらの少さき／穴へさしこみそれへおなじ竹の割／たるをこまへ縄といふはらなは／にて／かぶり／つくる図／。

⑤ 描かれている人物は四人。一番画面左上に描かれているのは、屋根の上でこちらに背を向けて

胡坐し、左手をつき、右手に槌を持ち、打ち付けている人物だ。その右手前には、こちらに体を向け、口にくわえた釘を取り、打ち付けようとしていると思われる男が描かれている。梯子の上の人物は、右肩に屋根に葺くであろう板を担いでいる。左端の人物は、足場である横木の上にしゃがんで、壁の芯となる竹を編んでいる。

十六、「上棟」



① 左

② 下辺全体に擦傷と手垢による汚れ。下辺左側に毛羽立ち。上辺から約1cm、左辺上から約4cm程のところ

に黒ずみ。上辺右隅に、墨の色移りと思われる汚れ。断ち落としがやや左寄り、台紙が上下ともに余る。摺り八回。手前の人物の左手・右足に版の欠落。角材には全体的に黄色、足場には肌色の縁取りが入っている。

左辺中段、足場の輪郭が途切れている。

③ 画題は枠無しで画面上段やや右に、まるで印のように三行に均等に分けられて、墨字で書き込まれている。画面上段右隅に「宮木印C」があり、その印の左下隅と文部印の右上隅が接するように押されている。画面左下、人物の足元に、墨字の「曜齋 國輝画」との署名。

④ 「第十三／上棟とて大工の切組をしたる木／品を薦人足とも仕事しともいふが／杉丸太にて足場といふてあしがかり／をわら縄にて結土台をすへそれより／柱をたて梁をかけ其上へ小屋と／いふて／家根の／形をとり／つくる図」

⑤ 画中には六人の人物。一番手前の人物が木材を抱えており、その奥の人物が画面右上・足場の上の男に木材を渡し終えるのを待っているようだ。足場の向こうにいる四人のうち、一人は植のようなものを左手に持って、石の上に腰掛けていている。画面中央の人物は、足場の一段目に左足を乗せ、二段目に右手をつき、斜めに掛けられた足場に左手をかけている。完全に建築中の家の中に入っているのは一人だけで、彼はこちら側に向かってかがんでいる。

十七、「左官（下塗り）」



① 右

② 右下隅を除く、三隅に汚れと毛羽立ち。左辺全体に汚れと欠損。右辺下段の三分の二から上に汚れ。画面右下隅、画題の右上、屋根の右端中程と、その右約三c mのところにも染み。左辺中段には破れ。摺り九回。中央の縦の柱と、中央の手に持つ「かい」のようなものの柄の交わりとところに、灰色が貫通している。中央の人物の顎から首にかけて青の色移り。

③ 上段右隅、画題のすぐ上に、右辺を揃えて、宮木印C。その左側やや下方に文部印。画面の左辺中央に墨字で「曜齋 國輝画」の署名。

④ 十四／左官のつかふ下塗の土は／あらきだ土をよしとする是を／やわらかにしてつと、いふて／わらを一寸位に切りたるをませ／是にて塗をあらかべといふ／其かわきたる／上へ荒木田土を／どろどろに水をいれて／ゆるくしごみをこし／とり又砂をよく／振ひて交合是にて／中塗をする／図。

⑤ 中には四人の人物。一番手前の男は木材を削り、その右の人物は両手で櫓のようなものに土を乗せて、足場の上の人物に渡している。右端の人物は荒木田土にひしゃくで水を加えている。

⑥ 中には四人の人物。一番手前の男は木材を削り、その右の人物は両手で櫓のようなものに土を乗せて、足場の上の人物に渡している。右端の人物は荒木田土にひしゃくで水を加えている。

十八、「瓦屋」



① 左

② 下辺左隅から下辺中央にかけ摺傷と手垢による汚れ。右隅から右辺の上段にかけても同じよう

な汚れ。左辺中央、宮木印Bのところ虫食い二ヶ所。左辺中段から上段にかけて毛羽立ち。断ち落として上方が余る。摺り八回。

③ 左上に線囲みの画題。その下2cmほどのところに宮木印B。右上に文部印、その下に宮木印C。左辺下段に「曜齋國輝」の署名。

④ 「十五／瓦師は家根／の模やうを見て／棟がはら谷がはら／巴瓦など入用／の品を見／つもり／瓦屋より／ひきいれやはら／かな土を家根へ／のせ其上へなぞへに／高下なきよふに／かわらをすゆるの図／是も左官の仕事／にてのこぎりをいれ／板はめなどのところ(？)／しつくひ／にて布／目などもぬり込む／をきづりと／いふ／」

⑤ 屋根瓦を張る様子である。画中には五人の人物。一人が屋根に上って瓦を張り、右下に粘土をこねる人物と、左側、中央に粘土を手渡して屋根まで運ぶ二人の人物。屋内には壁塗りをしている人物が描かれる。

十九、「瓦、煉瓦の製法」



① 右
② 下辺左側に擦傷、破れ。左辺全体に痛みと部分的に虫食い。摺り八回。

③ 画題は二重枠。右上に文部印、その下に宮木印C。右辺中央に「曜齋國輝」の署名。

④ 「瓦は荒木田といふ／土に水をませ幾度か／鍛にて切かへし能々／ねれたるを瓦の形に／木にて作りたる台の／上へ載はらをふり／竹へらにて能く／こすりはをほし／あげて土にてつき／あげたる釜へ入れかれ／松の枝にて蒸／やきにする図」

⑤ 瓦かま／図の如し／左の方煉瓦石／を製造する／ところ」

⑥ 画面は瓦の製法を描いている。前景では右の人物が屋根瓦をつくり、左の人物が煉瓦を作っている。

二十、「家屋の設計・割付」

いる。広報では二人の人物が煙の立ち上る釜の周りで作業している。画面左側には積み上げられた煉瓦と藁の上に干された瓦が描かれる。



① 左

② 左辺中段からやや下のあたり、画面中央を通り右辺の下段にいたって亀裂がはしっている。これは台紙に張り付ける以前に既に破れていたものとも考えられる傷である。右辺中段にカギ型の大きな欠失がある。四辺全体に汚れとけば立ちが見られる。左下隅や右辺上段に特に目立つ。右辺上段に5ヶ所程の小さな虫食い。ページの袋綴しの部分が下辺から上へ破れている。着物の藍色とおもわれる色移りが中段から上段にかけて7ヶ所程見られるが、これは現在の隣のページになっている。

る作品からの色移りではないので、他のあるいは紛失した作品から色移りしたのだろうか。摺り九回。

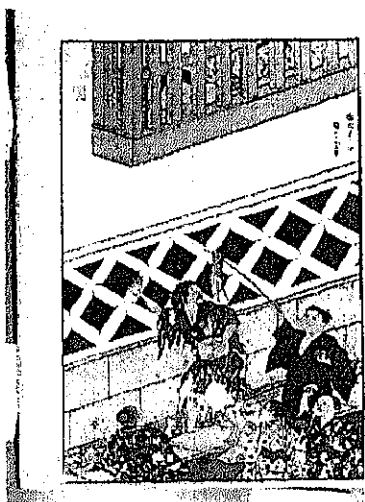
③ 上右端にある画題のたんざくの上部に山型でその裾を巻き込んだような装飾があり、下辺も緩やかに丸みがある。その左に文部印、その左に宮木印C。左辺寄りの真ん中に「応需 曜斎國輝画」の署名。

④ 「凡世の中に衣食住の三ツ／は身をたもつ道具にて其一とつ／の住乃字は人々の住居／する家の／事なり先其家を作らんとおもふ／には能普請になれたる人と住居／勝手の手よきよふに相談をして／何畳敷といふ間どりを極め／其上大工を呼んで普請の絵図に／仕様といふ／存の書附をさせる図／普請十分一／割付絵図／引仕様帳／認るの／ところ／」

⑤ 画面は衣食住のうちの「住」にあたる、家の設計を四人が話し合っている様子である。手前の人物が依頼主（家主）で、隣に茶を差し出す女性はその家内であろう。その右の人物は詞書による「普請なれたる人」で、畳敷や間取りの相談にあたっている。大工は左の机に座し、施行の概要と設計を書き付けているのがわかる。客人は座布団の上に座り、「普請なれたる人」に

は二枚重ねていることからその位の高さがうかがえるだろう。主人はキセルを左手に持ち、灰皿のような器がある。大工の机には左手側に文鎮、硯、筆、右手側に定規が乗っている。

二十一、「難澁者ヲ侮辱ムル童男」



① 左
② 画面下段左側に虫食い、擦傷による破れ。左辺全体に痛みがあり、中段右側に茶色の染み。摺り九回。

③ 画面上段左側に文部印、その下に宮木印C。
⑤ 手前には、ぼろぼろの着物を身にまとった女性（難澁者か）と、彼女をからかう男子四人が描かれている。左端から、両手を挙げる男子、左手に鞭のような細い棒を持った男子、右手に石を掲げている男子、そして、細い棒の先に草鞋を引っ掛けたものを女性の前に突き出してい

る男子がいる。画面上部には窓の奥からこの様子を見込んでいた男性二人が描かれている。

二十二、「疎漏より出で来る怪我」



① 右
② 下辺左側に大きな虫食い、下辺全体に毛羽立ち。下辺上部に汚れ、画にも表題付近、女兒の右足周辺に汚れ。摺り九回。
③ 上段左に文部印、その下に宮木印C。
⑤ 画面左手前に描かれた女子は両手を挙げ、店の土間から飛び出している。着物の裾には炎が引火している。彼女の様子に驚き、二人の男女が追いかけている。男性の足元には犬が一匹描かれている。店先には「きりやき」「〇やき」と書かれた行燈が吊り下げられ、その右横には三足の草鞋が引っ掛けられている。室内には、料理の途中のまま放置された食材（サツマイモ

か)や包丁、まな板などがある。

二十三、「小盗みする者」



① 左

② 下辺全体に毛羽立ち、虫食い、擦傷によると思われる色落ち。上段右に手垢のような汚れ。摺り十回。

③ 枠外上段右に宮木印C、その下方枠内に文部印。
④ 茶屋のような店の風景。店の左手前に木が生えている。画面手前の男子が、画面左奥で居眠りしている。画面手前の老婆の様子を窺いながら、箱の中の商品(紅白饅頭か)に左手を伸ばしている。画面右奥、簾の向こうには、この男子の所作を疑わしげに覗く男性が描かれている。店の向こうには水辺が広がっており、菖蒲のような花と、鷺のような鳥がいる。画面手前左隅には人力車か馬車と思われる乗り物の一部が描かれている。

るが、殆ど断ち切られているため、人が乗車しているかどうかさえ、判別できない。

二十四、「狡戯をなす童男」



① 右

② 下辺全体に毛羽立ちと、下辺左に擦傷、上段右に毛羽立ち。摺り九回。

③ 上段左に文部印、枠外左辺下に宮木印C。
④ 描かれている人物は、四人。高い塀の上に男子がまたがっている。右手に細い棒を持ち、軒下の小鳥の巣を突付けていたようだ。その左横に覗く枝には、二羽の小鳥(親鳥か)がとまっており、塀上の男子の方を向いている。塀の下には一羽の小鳥が落ちていて、巣から落ちてしまったのだらう。画面左側の男子は、この小鳥を捕まえようと両手を構え、駆け出している。右側の男子は、うつ伏せになって倒れている。草

鞋が片方脱げていることから、塀から落下したのではないかと推測される。家の窓の向こうから女性がこの様子を窺っている。

二十五、「心切なる童女」



① 左

② 下段左に擦傷による色落ち。大師に対して作品が小さく台紙の左が大きく余る。摺り十回。

③ 表題は二重枠で囲まれている。上段右に宮木印Cが二つ、右に文部印。
④ 橋上で老人の誘導をする二人の女子の姿が描かれている。老人は右手で杖を突き、目をつぶっていることから盲目かと推測される。左手に短い筒のようなものを持つ。左側の女子は老人の着物の袖をつかみ、先導している。右側の女子はむこうを向いて、手には筆と短冊状の物を持っている。老人の荷物であろうか。彼らの後ろには、

一頭立ての馬車が画面右から左に向かって走っている。馬車の運転手は断ち切れ、その奥に傘を差した男性がむこうを向いて歩いている。

二十六、「勉強する家内」



- ① 右
- ② 下段左に擦傷による色落ち、毛羽立ち。摺り八回。
- ③ 画面中央やや右に宮木印Cとその右に文部印。
- ④ 室内は母親、赤ん坊、男子、女子の四人がいる。母親は針仕事の手を休め、授乳しつつ男子が本を読むのを見守っている。女子は糸を紡ぎながら、本に目を遣る。壁には馬の玩具が描かれた手ぬぐいとはたき、箆が掛けられている。縁側には男子と男性の二人がいる。大工（父親か）が木材を削っている左横で、男子が削りくずに文字を書き、それを大工に見せている。

二十七、「争闘を好む童男」



- ① 左
- ② 下段左全体に擦傷、毛羽立ち。左辺が台紙からめくれ、左辺中央に細かな虫食い。上段左隅が破れ、画中央、二人の童子の部分にも毛羽立ち、背景の室内壁面にも毛羽立ち摺り八回。
- ③ 上段右に文部印その左に宮木印C。
- ④ 中央、棒（警棒か）を持った男性（警察官か）に右側の男子が咎められている場面。画面左、二人のうち、右側の男子が額に傷を負っており、またその足元に小石が落ちていたため、咎められている男子が、画面にある「争闘を好む童男」ではないかと推測される。怪我をした男子の左にいる男子は、右手を差し出し、彼を心配そうに見ている。

二十八、「勉強する童男」



- ① 右
- ② 下段左に虫食い、毛羽立ち、下段右に擦傷。また、左辺綴じ部分全体に痛み。摺り九回。
- ③ 上段右に文部印、その左、枠外に宮木印C、左辺枠外に宮木印B。
- ④ 描かれている人物は六人。画面左、店番をしながらも筆を握り、勉強に勤しむ男子と、店の周りで遊ぶ男子たちとが対照的に描かれている。画面手前中央、二人の男子は独楽を回し、店の柱に掛けられた「名物 塩せんべい ともや」の看板の奥では二人の男子が犬を追いかけて遊ぶ。右奥の男子は、右手に鞭のような細い棒を持っている。彼らの左手前には、ステッキを持ち、帽子をかぶった和装の男性が勉強する男子を感心した様子で見つめている。店内の台には煎餅と思われる商品が並べられ、「せんべい」「まめ」と書かれた紙袋が置かれる。